

チェンマイ大学での貢献 (40)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

本報では筆者がチェンマイ大学に赴任以来長年にわたり懇意にしているソムチョット先生との関係を紹介したい。言うならば専門分野を異にする「もう一つの貢献」の紹介と言う事である。本文に登場するソムチョット先生は専門が歴史学で、その学術活動も極めてアクティブで書籍の執筆出版などに目を見張るほどの勢力と驚きを感じさせられている。先生とどうして知り合うことが出来たのか、そのいきさつについては定かではないが、学術活動の一環でもあろう。外回り活動とは現地視察(Field trip)を意味し問題や話題の場所を訪れ、現地の住民を前に話をしたり、収集したデータをもとに発表・意見を提案するもので、言うならば普及活動(Extension)にも似た活動である。先生の専門である歴史という観点から、現地を訪れつづさに現場現物を視察調査することや、長年居住している現地住人からの聞き取り情報や証言、建物の位置関係などについては現地ならでは得られない情報と思われる。いわゆる足を使った地道な調査が必要な専門分野である事は明白である。先生はチェンマイ市を流れるピン川の支流であるメカ(Mae Kha)川が旧市街を流れ、その水質汚染が進んでいることから、何とか元通りのきれいな川に戻そうと言う事で、別の先生(工学部)が先頭に立って推進するメカ川浄水化活動の一員としても参加しておられる。筆者も上記工学部の先生からの誘いもあり、その活動に度々参加同席したことから、いつしか知り合う事になったものと推察する。川沿いに居住する住民は長年の住処を容易に離れる事は当然のことながら承諾しかねる。しかし水質汚染が進む現状を前になにがしかの対応・処置が必要である。歴史的な背景や地勢の変化、居住環境の変化を交えた総合的な判断に基づく具体的な対応が提案されなければならないが、その速度は必ずしも迅速ではない。住民個々の利害や地域としての利権など複雑な社会的要因が複雑に絡み合い改善に向けた対応は必ずしも円滑に進んでいるとは言いがたい。しかし浄化活動を継続しなければ事態は悪化する一方である事は誰もが周知している。そうした背景もあって先生には度々顔を合わせる機会があつて、深くおつきあいすることになったが、接点は主として先生の書籍出版に絡む原稿の和訳である。筆者も専門用語、特に歴史のみならず、タイの仏教歴、ある時代からある時代にわたる国王や王女、王室家族の名前などを周知しているわけではない(というよりは殆ど知らない)のでその訳にも多大の時間を費やし正確を期す努力をしてきた。いくらか苦痛とを感じる時も少なくはないが、自らを強く後押しするものは何かと言うと次の2つである。1つは訳者として自分を選んで頂いた事への感謝であり、信頼を裏切らない事への配慮、2つ目はタイの歴史を学ぶ絶好の機会と捉えることで却って勇気が湧いてくる。昨年ラマ9世プミポン国王が逝去され、偉大な国王の死に国中が悲しみに暮れた。ソムチョット先生はすかさずもう一人の偉大な国王ラマ5世からラマ9世までの歴史をまとめた書籍を著された。

その一部に筆者の簡単な訳文もある。いつも思いがけなく、またメールでの突然の和訳依頼の申し出と言うスタイルであるが、気楽に応じて、出来るだけ早い仕上げを心がけている。報酬は一切ないし求めない。時にはバナナ1房が謝意の表明であったりすることもある。先生らしい心使いである。しかし必ず書籍出版の後には余部を一部持参してお礼参りに出向いて下さる。持参頂いた書籍を手にする度に、その勢力的執筆活動にいつも驚かされる。また同時に励まされる。学祭的知識が求められる今日、専門が異なっても積極的に接点を探求し、互いに努力すれば興味ある結果を引き出せるモデルの一例と理解している。

ところで先生の娘さん（御令嬢）が日本の有名私大に留学するので、先生と同様にチェンマイ大学の教員をしている妻と日本に行き留学予定の大学を見てきたいので「誰か知人を紹介して欲しい」との依頼があった。娘様は未だ研究生の身分でこれから受験をして合格すれば修士課程に入学することになると言う状況にあり、指導教員を受験前に訪れるのもどうかといった躊躇もあった。筆者も依頼はされたが専門が異なるので手の打ちようがない。しかし依頼された以上は何とかしたいと思いつつも妙案がなく、時間だけがいたずらに過ぎた。考えたあげくに出した結論は娘様が受験し合格した後の指導教員に直接話をしてみようと言うことであった。見ず知らずの他大学の、しかも専門の異なる先生に初めて連絡を取るのはいささか迷いと失礼な行為になるのではとの配慮もあったが取りつくしまもないので、思い切ってメールした。運良く指導教員となられる先生から御返事があり、大学の国際交流課を通じて先生ご夫妻を受け入れる対応の準備を進めるとのことであった。宿舎も大学の方で手配頂くとの報であった。先生は訪問中に大学でセミナーを実施し交流を図るとの内容で訪問予定は固まった。その後娘様は受験に合格し、修士課程入学を果たし2017年3月末に無事修了の運びとなった。修士課程での指導教員の先生が定年退官にかかるため、博士課程進学後は別の先生が指導教員になると聞いた。いずれにしてもいささかでも筆者の支援がきっかけで一人の若者が修士課程を終え、さらに博士課程進学への道が開かれたことは本人はもとより先生ご夫妻、指導教員の先生、ひいてはタイ・日本の関係強化に少なからず尽力できたという充実感に一抹の誇りと自信、こうした機会に巡り会えた事への感謝の気持ちを覚える。言うまでもなく指導教員のお力添えはもとより、先生のご令嬢自身のたゆまない努力なくしては今の状況はあり得ないが、まさに「本当に良かった」という思いである。残念ながら筆者は社会科学が専門でないからどの様なことについて御令嬢が修士論文をまとめられたのか委細は知り得ないが一つの目標達成に協力できたと言う満足のお裾分けぐらいは感じ取る事が出来たと言う思いである。



図1 ソムチョット先生(左) と筆者(右)



図2 ソムチョット先生の執筆書籍 (近刊)



図3 CMU学生によるメカ川清掃



図4 金網に石を詰めた蛇籠堰の設置



図5 メカ川浄化委員会の集いに参加の筆者



図6 バンコック洪水時にCMUが提供の簡易ボート (石油ポリタンクを浮きに利用)